

例会抄録

幕末・明治初期の電気治療

中村 昭

江戸時代中頃に平賀源内らが静電気の起電機（これをエレキテルと言った）の実験をしたことはよく知られているが、これは実地の医療的応用にまでは至らなかった。

蘭学も幕末の頃には物理学、電気学等の分野までかなり水準が高くなり、電気治療も実際に行われるようになった。その一つの資料として、安政五年に出た『内服同功』という刊本がある。これは内服薬以外の種々の治療法を図解して説明したものであり、この中にエレキテルの器械の作り方とその応用方法も含んでいる。また万延元年に出た『内服同功』続篇ではボルタ式電池の作り方や、ファラデーの感伝電流の作り方も具体的に説明しており、治療上実際に使われていたことが確かである。

明治初年に移ると、明治五年から七年にかけて出版された『東校医院治験録』の中にも図解入りで、ドイツ人教師のミュラーとホフマンが行った電気治療の詳しい説明がある。

ここで行われた電気治療は直流または感伝電流による電気刺激療法、直流による電気灼断療法、ブリーシーによる電気分解療法等

である。これらの器械はドイツから取り寄せたものであり、ミュラーとホフマンはその頃の最新の治療法を示説したと思われる。

（平成二年六月例会）



紹

介

三浦豊彦著『労働と健康の歴史 第六巻』

本書は『労働と健康の歴史』の第一巻から第四巻と、『労働と健康の戦後史』の五冊の要約とも言える『労働衛生通史』を中心に、展望、労働衛生史、医史学と私、及び僕の昭和史の四部構成となっており、著者の喜寿を祝って出版されたものである。

今迄、著者が労働衛生史を精力的に発表してきたこと、生涯を労働科学研究所とともに歩んだことは多くの学会員の知るところである。また、最近は労働衛生史の普及と後進の育成のために日本産業衛生学会のなかに「労働衛生史研究会」を作り、その主催で御苦労されている。

労働衛生史は労働者側、経営者側、行政、労働衛生学者、さらに個々の職業病や労働条件を歴史的にみる等の立場でその内容に相違がでてくる。このようななかで三浦の研究態度はおおむね中立的であり、事実を事実として記述している。これは通史を書く時の基本条件である。三浦はこの通史を書ける数少ない、いや唯一の研究者であらう。

本書のなかでもふれているが、著者は『労働衛生ハンドブック』の監修を行っており、労働衛生の実践家である。このことは歴史的事項をまとめるときに役立つだけでなく、まとめられたものに信頼がおける。

私は特に医史学の研究者は医史学の研究だけでなく、実験、診療等の実務を行うことによって、研究の幅がでるといえるのか、あるいは核心にふれる研究が行えると思っている。実践経験の少ない歴史家の研究を軽く見ているわけではないことはもちろんである。最近、労働衛生史の研究のなかにもあまりに理論が先行しているものを見かけることが多くなってきたから、「労働者の受難の歴史」を科学者の眼でみる基本に立ち返る契機を本書が与えてくれる。

現在、本書にふれられているような眼に見える障害は少なくとも、テクノストレスのような健康被害が現れてきている。また、余暇と労働の関係、外国人労働者問題、労働時間を含めて二十四時間の生活と健康の問題、国民皆労働者時代、等の今迄に経験しなかったことに対し、これからの労働衛生史は生活衛生史の面を強くだしてゆくであろう。これからの労働衛生史は三浦の労働衛生史の延長上にあるが、その内容は大いに変わることが予測される。

三浦は「日本の労働衛生史にあらわれた労働保護対策は発展途上国では役立つと思われる」と言い、また「いずれにしても、私は、労働衛生史の研究が、現に存在する、あるいはこれから起こるであろう労働者の健康障害防止に役立つことを期待したのである」と結んでいる。

本書は産業保健に携わっている人々の必読の書であるばかりでなく、先端技術を駆使して活躍している研究者に労働災害の歴史を学んでもらいたい書でもある。さすれば、現在、行われている遺伝子工学の各種の野外実験を慎重に行う必要があることを学ぶであろう。

もちろん、本書の前に出版されている『労働と健康の歴史』全四巻と『労働と健康の戦後史』を併せてご利用されることを希望する。

(清水 勝喜)

〔労働科学研究所出版部 一九九〇年 A五判 二四四頁 定価三、六〇〇円〕

看護史研究会編、加藤文三協力 『看護学生のための日本看護史』

本書は、「はじめ」のところで執筆において次の三つのねらいをほぼ貫くことができたと思うと述べている。それは(一)看護職が民主的運営と集団学習によって、自らの手で日本看護史の通史をまとめ得たことであり、(二)できうる限り史料の原典にあたって、科学的根拠に基づいて書くことに努め、歴史学の批判に耐えうる看護史となし得たことであり、(三)各時代の人びとの生活と健康の実態をできるだけ正確にとらえ、そこに視点を置いた看護の歴史を書き得たことであるという。確かに本書は、従来の看護史にみられない形体で執筆されており、新鮮な内容を持つ

た優れた看護史である。とくに各時代において人びとの生活と健康の実態をできるだけ正確にとらえ、そこに視点を置いた看護の歴史を記している態度は、看護史を比較文化的な観点からとらえようとする姿勢がうかがわれ、高く評価したい。

本書の構成をみると、時代を先ず大きく前近代・近代・現代と分け、さらに前近代を原始・古代・中世・近世と細分し、近代を明治初期・近代看護・大正期・医療社会化のなか・十五年戦争のなか・と細分し、現代を戦後・現在と細分している。また原始・古代・中世・近世・明治初期・近代・十五年戦争のなかの時代における看護史では、「ズーム・イン」という項を設けて、それぞれの時代のトピックスを述べ、さらに多くの図解を文中にとりいれていることは、読者の関心をひくのに大いに役立つものと思われる。

ところで「ズーム・イン」の中で古代では「聖徳太子をめぐる伝説について」、中世では「看病用心鈔について」および「府内に育児院は建てられたのか」、近世では「幕末の医療史をめぐるいくつかの問題」について、石原明、筆者、長門谷洋治共著の看護史（『系統看護学講座別巻九』医学書院）の内容を批判している。これらについては「看病用心鈔について」を除いては御指摘の通り間違っていたので直ちに訂正を行った。

看病用心鈔については、これは看護書ではなく「あくまでも浄土宗仏典の一つとしての『仏教書』である」と述べているが、この考え方はやや短絡的に過ぎないだろうか。今日ターミナル・ケアのあり方が大いに議論されるようになり、死が近づいたときは、

濃厚な医療や機械による管理を、生前から辞退することを明らかにしておく（尊厳死）運動や安楽死を認めさせようとする運動が起こりつつある。また、がんの末期患者には鎮痛薬の使用などのほかは積極的な治療を行わないホスピスの試みも行われるようになった。さらに米国では、死が近づいた時は治療を辞退して、精神的な安定を聖職者に求める人がある。これらのことを総合してみると、看病用心鈔は看護の正面からの否定ではなく、立派な看護書といえるのではなからうか。

ついで本書は「十五年戦争のなかの看護」の章の「ズーム・イン」において、戦争体験をどのように伝えるかという題で、看護婦の手になる戦争体験の手記には戦争反省の記事が極めて少ないことを率直に記している。このことは人の命の大切なことおよびこれを守ることがいかにむづかしいかということを、私達にしっかりと認識させてくれる。と同時に看護職にたづさわわる者はいかにあるべきか、ということを示唆しているものである。

最後に本書の内容は極めて豊富であるのにくらべ、本文は簡略であるために、看護学生がこれを理解するには荷が重すぎるのではないかと思われる。ともあれ、ここまでよく調べられたこの本によって、日本の看護史の研究がますます盛んになることを期待したい。

（杉田 暉道）

〔医学書院 一九八九年

B五判 一五八頁
定価二、二六六円〕

著者は英文学を専門とする方であるが、郷土史にたいする造詣が深く、昭和四十七年『東北の長崎—米沢の洋学』（置賜文化シリーズⅢ）を出版された。この時は米沢藩のもとの蘭学・英学そしてチャールズ・ヘンリー・ダラスについて取り上げ、上杉藩の開明的な側面について紹介した。蘭学では、堀内素堂、伊東昇迪、吉雄忠次郎について紹介し、上杉藩における蘭学の様相を明らかにした。ダラスについては、人物評やエピソード、講義と教材そしてダラスの論文を翻訳（置賜県雑録、米沢方言）し、ダラスの知られざる一面を余すことなく紹介した。著者はこの後も研究を継続され、それらを集大成したのが『東北の長崎—米沢洋学の系譜』である。全部で十一章の構成からなる内容は、米沢の洋学にまつわる様々の分野の人びとが収録されている。医史学に関係した部分は次の章である。

第一章 坪井為春をめぐる人びとでは、まず米沢藩における蘭学について触れたのち、坪井信道、堀内忠寛（素堂）、鈴木千里、坪井信友、坪井為春らを取り上げるとともに彼らの蘭学撰取や学問を通じた交流、そして業績にいたるまでを述べている。第二章 伊東家をめぐる人びとでは、伊東家にまつわる人びとについて詳細に述べられている。伊東昇迪祐徳、伊東昇迪祐直、伊東祐順、平田東助、伊京祐彦（九州帝国医科大学学長）など。医家以外の人では祐彦の弟、忠太（建築学者）も詳しく紹介されている。

第六章 樫村清徳をめぐる人びとでは、清徳の足跡に考察を加え、幕末から明治にかけての日本医学界の流れと対比させる中で、樫村の活躍を描いている。

この他、第三章 藩籍奉還前後の上京者たち、第四章 米沢英学事始、第五章 池田家の人びと、第七章 甘糟家をめぐる人びと、第八章 蘭学の統制と中條政恒、第九章 海軍王国の誕生、第十章 英和女学校の顛末、第十一章 異色のリベラリスト河上清、という内容構成になっており、第七章 甘粕家をめぐる人びとでは、同家と新島襄との関係について言及している。著者は、「本書が、英学史的な観点からだけでなく、明治期の人物史としてまた明治初期の教育史として読んでいただければ幸いである」と、あとがきで述べているが、上杉氏の伝統を受け継ぐ藩校「興譲館」を中心とした自由な学問の系譜を明らかにした著者の努力に脱帽したいと思う。本書では米沢の地において高まった洋学にたいする認識を受け継ぎ発展させた人々について地域史のマクロな視点と、洋学のグローバルな視点とが調和して、中央で活躍した人びとを含め、登場する人びとの世界が生き生きと書かれている。註釈もふんだんなうえに、人物索引も充実してわかりやすく読みやすい本である。著者の研究がさらに飛躍することを期待したい。

（小形 利彦）

〔ぎょうせい 一九八八年 B五判 四三〇頁〕

定価三、五〇〇円〕

松田誠著『脚気をなくした男—高木兼寛伝』

著者の松田教授と筆者は、慈恵医大の同窓で、専門を共にした一時期があつたため、若い頃から、学祖高木兼寛については、何度となく語り、また論を戦わせた経験がある。

本書を手にした瞬間、そういつた過去の対話から感じ取つた—著者はある意味では高木兼寛の敬愛者だということ、何時か高木兼寛についての自己の考えを世に聞きたいと言つていた—ことなどが脳裡をよぎつた。

したがつて本書は一朝の所産ではなく、著者が長い年月、自らの頭の中に温めていた資料を駆使して練り上げた、いわば高木兼寛の塑像であり、さわやかな好著とも言えよう。

高木兼寛の伝記は過去にも書かれ、またその裏づけに関しては、医史学の領域ですでにたくさんの方の史実が知られている。本書の随所に著者独自の新しい知見も加えられているが、伝記の骨子を揺がすものではない。しかし、本書には高木兼寛の人物表現に、著者の苦心の跡が滲み出ており、視点を変えれば十分楽しく読むことができる。恐らく著者は、現世に高木兼寛ありせば、との構図を胸中に秘めつつ、その事蹟を尋ねたのであろう。

序章を設け、英国の南極地名委員会によって名づけられた、南極半島の一隅のタカキ・プロモントリの由来から筆を起こしている。

第三、第四章の脚気やビタミンB₁関係は、生化学、ビタミン学

者である著者の縄張りだけに、しつかりとまとめられている。

著者が最も苦心したのではなからうかと考えられるのは、第五第六章で、慈善病院造りにはじまり、病人に奉仕する医師育成を指向した、医育機関の設立とその発展に心血を注いだ高木兼寛の姿の記述であつたと思う。

要は、高木兼寛は、中世以降の永い歴史と伝統に培われた、誇り高き英国の医学をしつかりと身につけ、臨床医家の本分に徹して生きた人物だったのである。ざりとて高木兼寛が学理を軽んじた人物では断然なかつたことだけは敢て付言しておく。

かつて、官立の医学専門学校には、斬新だつた医化学の講座が未だなかつた時代に、高木兼寛は須藤憲三（のち金沢医科大学長）を聘して、慈恵でそれを開講した。高木兼寛お声掛りの唯一の弟子との呼び声の高かつた永山武美（慈恵医大第三代学長）が、明治四十一年、学校を卒業した時点で、何を専攻すべきかに迷い、当時慈恵の講義を担当していた東京帝大の内科の某教授の医局への入局を願つた。そのことを耳にした高木兼寛は、永山に「お前は臨床医者などになる必要はない」と毅然として基礎医学に進むことを命じ、後日、須藤憲三の跡を襲わしめたのである。

また、これとは裏腹に、高木兼寛は臨床医の基礎医学的研究を強く抑制した。臨床医家には病者を救う研究こそが本義であり、学理的研究の要があれば、それぞれ専門の基礎医学の指導下に為さるべきだとの見識によつたのである。この思想は彼の没後も継承され、終戦後、日本の医学が米国式に塗りかえられるまで続いた。

〔講談社 一九九〇年 B六判 二二二頁 定価一、八〇〇円〕
(久志本常考)

実学資料研究会編『実学史研究Ⅵ』

「生活機能を高める社会経済の動態を誘発継起させる作用となる諸学の総称」を「実学」と定義する共通認識をもって発足した実学資料研究会(代表・末中哲夫)は、一九八四年以来その研究成果を医業史を含む論考や史料紹介、解説など多方面にわたって収載した『実学史研究』単行書をシリーズとして毎年刊行を続け、医史学研究者の間でも見逃がせぬ著書として定着し、斯界から好意的評価を受けつつ今回で第六冊目を数えるに至っている。

今回の論攷篇は、江戸期に利用度の多かつたミンチングの植物学書を詳しく論じた矢部一郎の論文をはじめとし、一八、九世紀のヨーロッパ社会の構造と医療を概観し、日本に導入された洋方医学の性格を論じ、従来の研究の欠を埋めようとする石田純郎の論文、地域医療史の領域として在村医の地域医療の実体の究明(土井作治)や、牛痘接種法の普及を転機とする地方蘭方医の具体的実体例(菊地卓)などの好論文、さらには大坂華岡塾合水堂に入門した中村順助の日記(近畿大学図書館蔵)などを通して修業実態を手掛りに、師弟、修業生の共同体の考察にふれた興味深い論考(末中哲夫)、佐久間象山の電気治療機(沢田平・東徹・出水力)、美濃蘭学と写真術に関する地方写真術研究を通して舎

密術知識の普及度ほかを論じた最初の総括的論文(遠藤正治)などが取められている。

史料篇では、前冊・前々冊に続く戦後に発掘され注目を浴びた「越前栗崎文書」(福井市栗崎道夫蔵、福井市立郷土歴史博物館寄託)の分載(第三回目)と解説(伴五十嗣郎)があり、数少ない南蛮外科の基本史料として利用が期待される。

また、江戸医学館で本草を講じた小野蘭山の公勤日記『蘭山先生日記』(国会図書館白井文庫写本を底本とし、小野強蔵自筆本で対校)の分載(第二回目)と解説(末中哲夫・遠藤正治)がみられ、前記の史料とともに全文最初の活字化がはかられ、研究者の目にふれ易くなったことを喜びたい。

もう一編の史料『異国船一応扣』(岩手県立図書館蔵)と解説(藤原遼)は直接医史に関係あるものではないが、幕末北辺の興味深い史料である。

医史学の研究が、医書と人物を主体とした従来のテーマから、社会と医療機能の問題に拡大しつつある現状から、本書の活用は欠かせぬものとなる。

さらに、実学研究が日本のそれにとどまらず、中国、韓国に拡大され、東アジア文化圏の中へすすむとき、東アジア伝統医学と日本のそれとの問題が重要な課題となってくる。そのような面からの論及も向後に期待したい。

(宗 田 一)

〔思文閣出版 一九九〇年 A五判 三三三頁 定価五、九七四円〕

神谷敏郎『人魚の博物誌—海獣学事始—』

本書の著者神谷敏郎氏は、日本医史学会の前理事長である故小川鼎三氏の解剖学の教え子である。また、本学会の会員であり、本学会総会、例会で研究発表されたり、本誌に論文を発表してきた方である。

本書は、海獣学、海牛学への招待、啓蒙を目的として書かれている。第一章「人魚学事始」、第二章「大海牛」、第三章「人魚の解剖学」、第四章「人魚の現地調査」、第五章「人魚学の現状と今後の課題」から成る。目次からわかるように、本書の主体は、海牛学の歴史、海牛の生態、形態（解剖学）である。

この本が本誌の「紹介」の対象となる章は、第一章の「人魚学事始」であり、その中の「人魚に関する記載—西洋と東洋」である。著者は「あとがき」で「人魚にまつわる考証は、思師、小川鼎三先生（一九〇一〜八四年）をお偲びして、科学史の一端として取り組んでみた」といっている。

そもそも人魚⇨海牛は、哺乳類カイギュウ目（海牛類）ジュゴン科、マナティー科の水棲動物である。日本人になじみのものは、ジュゴン科ジュゴン属のジュゴンである。ジュゴン科カイギュウ属ステラカイギュウ（大海牛）は、一八世紀中頃、人間によって絶滅させられて現存していない。一方マナティー科にはマナティー属のアメリカマナティー、アマゾンマナティー、アフリカマナティーがいる。

著者は、リンネの『自然の体系』第十版（一七五八）に「哺乳綱、鈍重目、カイギュウ属、アメリカマナティー」とあるとしている。リンネ分類は、江戸時代に渡来しており、リンネ分類にもとづくホッタインの『博物誌』では、どうなっているのであろうか。また、ヨンストンの『動物誌』の場合も気になるところである。

寺島良安の『和漢三才図会』（一七一三）と大槻玄沢『六物新志』（一七八六）に人魚の記載があることが紹介されている。『六物新志』では、パレの外科書、ファレンタインの地理書、ヨンストンの本を引用している。図はファレンタイン、パレのものである。著者は、パレの図は人魚体奇形の症例としての図であることを教えている。文中「アンブルスパアレ」と玄沢がしているものを、「アンブル」と「スパレ」に切っているのはいかげなものか、Ambrose Paréなのであるから。

第一章にある「人魚から儒良・海牛へ」において、日本では、明治から大正にかけて、海牛類に対する正しい認識が、動物学の確立とともに進んでいったことが示されている。

江戸時代の博物学に関心をもつ私にとっては、本書のこの章は、著者の示したものの以外の書物に人魚⇨海牛の記載があるか、それは、どういふ記載か、関心をもたされた。本書は、私に刺激を与えてくれた。これは、著者の目的からははずれているのであろうが。

（矢部 一郎）

〔思索社 一九八九年 B六判 二二三頁 定価二、〇〇〇円〕

青木國雄著『医外な物語』

本書はすぐれた仕事をした人たちの生きざま、死にざまを執筆するようにとの依頼に応えて、著者が医学にまつわる人間模様を記した、物語り風のエッセー集である。有名な人がどんな病気にかかって、何歳で死んだかという単なる事実の羅列だけでは興味がないため、落語の三題噺をもじって書かれたのが本書である。

ふつうなら「腸チフスと赤痢の歴史」と書けばよいものを、著者は「傷寒とタイホイド・マリーと太閤秀吉の赤痢」といったふうになら三題噺として、その共通点にスポットを当て、上手に結論を引きだしている。

八年かかって雑誌に投稿した九十九話が掲載され、四〇〇ページを越す大作である。一話一話が独立してそのいづれもが四ページに収められているので、読者に違和感を与えることなく楽しく読める本である。意外という話のオリジンから『医外な物語』と名付けられた。

内容は診断・治療物語、疫病物語、成人病物語（中風・ガンその他）、芸術家・学者の病歴、昔語りから、伝染病予防物語、衛生物語、社会福祉物語、明治の医学・医療、保健・長寿物語の十項目から成っている。細部をいちいち説明することは出来ないが、「疫病物語」を例にとるならば、その中に種痘、麻疹、ペスト、ローヤル・タッチ（るいれき）、脚気、梅毒、マラリア、キニーネ、腸チフス、発疹チフス、コレラ、黄熱、飢餓と疫病などがあ

ざやかに描写されている。

本書に登場する人物は、釈迦、秦の始皇帝、光源氏のモデル藤原道長、杜甫、頼朝、曲直瀬道三父子、伊達政宗、秀吉、家康、信玄、謙信、松尾芭蕉、小林一茶、頼山陽、漱石、鷗外、アレキサンダー大王、アルキメデス、ビタゴラス、パスカル、デカルト、ナポレオン、パスツール、チャーチル、スターリン、ヒトラー、ケネディ、ヴァーグナー、モーツァルト、メンデルスゾーン、スメタナ、ビルロート、ミクリッツ、ザウエルブルック、フロイト、シーボルト等々、古今東西の政治家、学者、著述家、芸術家、音楽家、医師その他数々の著名人が網羅されているといっても過言ではない。それらの人々が死亡した病名と年齢もおおむね記されている。しかし、それよりも興味をそそるのは、平生から持病と戦いながら天寿をまっとうした生きざま、若くして病に倒れるに至った死にざまである。

著者の専攻が予防医学である関係から、その道の造詣は深く、五十年前の長寿法と現在のそれとの比較なども大変面白い。著者の博覧強記とそのレバトリの広さには一驚する。と同時に今の今まで知らなかった数々のエピソードを知ることが出来たというのが本書の読後感である。

（大滝 紀雄）

〔名古屋大学出版会 一九九〇年 13cm×16cm 四一六頁
定価二、五〇〇円〕

富士川英郎著『菅茶山上・下』

本書は茶山の住んでいた神辺町と彼の家系から筆を起し、茶山の生涯を彼の詩や歌を点綴しながら、多数の文献を博引しつづ、年代を追って詳しく述べたものである。しかも交渉のあった知識人(学者、医家、僧侶、画家等)の小伝を挿入して、その環境を明らかにし、当時の文人生活を生々しく活写した。森鷗外の『伊澤蘭軒』に劣らぬ力作である。

有名医家との関連を少しく摘録すると、

若いとき和田東郭に学んだ。その後もしばしば訪れ、あるときは宿泊し、あるときは薬を乞うた。又晩年には墓参した。

伊澤蘭軒とは同じ福山藩だったためか、とくに親交をかさね、互いに多くの詩文や書簡の応酬があった。また彼の江戸滞在中は家庭的な援助を受けた。

田中新蔵(適所、寧固の子)、茶山の微恙のとき診を乞うた。

橋南谿、宴席を同じくし、また後に茶山の塾を訪ねた。

小石元俊、茶山の弟恥菴の病状を茶山に報した。

華岡青洲とは面接はなかったらしいが、茶山の弟子に送った詩に塲科出神匠とある。青洲の子(雲平)は茶山の塾に入門した。

惠美三白(大笑、寧固の子)は茶山の養子萬年を診した。また家塾を訪れた。

土生玄碩は東郭に学んだが(茶山より後に)茶山の噂を弟子に話した。

永富獨嘯菴の子充國、新宮涼庭、坪井信道など多くの医人が茶山を訪ねた。

畑黄山の医学院で虫干しがあると誘われたが、見学は果さなかった。黄山の嗣子柳泰とは招宴にて席を共にし、かつ彼に書画を示された。

福井裕亭(楓亭の子)に書画骨董品をみせてもらった。

百々某を訪ね、沢山の骨董品をみた。この百々は町医で俊道、字は仁傑としている。このような富裕の医家であれば、学医として評判の高い漢陰(俊徳)ではないか。お伺いしたい。

その他森養竹(枳園の父)奥劣齋などの名がみえている。

要するに本書は江戸文化の最盛期の知識人の生活、民間の風習行動を知り得て、きわめて興味深い。二、三実例をあげると、

当時著書は自家出版で、韓非子翼蠢の活字印刷の苦労話もあるが、茶山の詩集は特別に本屋より出版された。

東海道道中をはじめ旅行記はとくに筆に精彩があり、東海道五十三次の浮世絵をみる思いがする。

文人の会合を謀反を企てる会合と疑い、家婢が逃亡した。

詩人の作詩の苦労は陣痛より甚しい(腹中にあるを出すと無いものを出すので)との話。

贈答品に虎屋の菓子、鯛の浜焼などがある。また当時の料理の品目など、思わず微笑を禁じ得ない記事が多い。

茶山は本邦漢詩人として五指に入る大家。漢詩に興味ある方の必読の本である。とくにその訓み方、故事を示し、作詩の背景を知るのに、よき鑑賞の教本でもある。

最後に索引のあるのは大変便利で有難い。

誤植の少いのは好感がもてるが「櫻」と「櫻」との誤（上九七頁）、次に上一五二頁の漢詩はその承句転句を改めたところがあるが、「復歳除」は前の詩の觴と光との韻と異り、誤植があるろうと思う。

これらは小瑕にて大作の価値を下げるものではない。

文学にまつた多くの素人にこの文芸大作を紹介せよとは、編集幹事の間違いで謝絶すべきと思ったが筆碌の予防薬として筆者に課されたと考えなおし、筆をとった。著者に対し妄言を深くお有しを乞う。

（長谷川弥人）

〔福武書店 一九九〇年 A五判 上巻五五六頁
下巻五三〇頁 索引二五頁 定価八、五〇〇円〕

湯浅泰雄著『身体論—東洋的心身論と現代—』

本書は一九七七年に創文社の叢書『身体思想』4として刊行された『身体—東洋的心身論の試み—』の英語版 The Body: Toward and Eastern Mind-Body Theory, ed. by Thomas P. Kasulis, translated by NAGATOMO Shigenori and Thomas P. Kasulis, State University of New York Press, 1987 (ハードカバー) である。原著との間には、いくらかの改変が行われているし、サブタイトルも「東洋的心身論と現代(傍点に注意)」のように改められている。評者の持っている原著は、一九八二年の第五刷本で

あるから、発行後かなり高い評判を得たものと推測されるし、また、インドのヨーガや中国の気功の盛行にもなっており、東洋的心身論への関心かけが行われている今日、その出発点ともなった原著が装幀を新たにして文庫本として刊行されたのは、まったく時宜を得ていると考える。

著者、湯浅泰雄氏（前筑波大学教授、現桜美林大学教授）は、元来西洋近世哲学、特にユングの分析心理学の立場から日本思想を考察されて、『近代日本の哲学と実存思想』など日本思想研究のすぐれた著作があり、また、C・G・ユングの日本への紹介という面では、Das Geheimnis der goldenen Blüte, ein chinesisches Lebensbuch, 1929の邦訳『黄金の華の秘密—中国の生命の書—』（人文書院、一九八〇年）など、いくつものユング紹介をもされている。のみならず、近年は東洋思想の現代精神世界における価値の読みなおしを強調されて、内外のさまざまな知的領域の学者を集めて、「科学・技術と精神世界—東洋と西洋の対話」（一九八四年秋）、日中協力シンポジウム「気と人間科学」（一九八八年秋）というスケールの大きな二つのシンポジウムを実現され、いわば、この方面でのリーダー的存在として、われわれにさまざまな知的刺激を与え続けておられる。

つづいて、本書の構成は、序説 研究の目的と問題の概観、第一章 近代日本哲学の身体観、第二章 修行と身体、第三章 東洋的心身論の現代的意義、結論から成っていて、そのうち、直接医学に関係しているのは第三章である。著者は東洋思想の身体論の特徴を、内面的瞑想と外面的行動の両者が向う理想的境地として

の「心身一如」であるとし、そのような境地の体得は、心身のすべてを打ちこんではじめて到達できる実践、すなわち「修行」を前提としていふと考える。

このような身体観は、近代的な科学的身体観とはちがって、感覚によってその存在を認知できる「生理的身体」の根底に、「深層心理的身体」、あるいは心でも身体でもない第三項的な準身体とよぶしかないような存在が想定されている、と著者はいう。インドのヨーガで説かれるナディ(氣道)や中国医学で重視される経絡は、そのような身体観に立つのでなければ理解しえない、と著者は考える。そして、この身体観については、西洋思想の側からもすでに、ベルグソンの「運動的図式」Le schème moteur の仮定、あるいはメルロー・ポンティの「習慣的身体」Le corps habituel の仮定などのような独自のアプローチがなされ、やがてラインの「超感覚的知覚」Extra-sensory-perception の存在を想定するところまで達している。

だが本書における著者の東洋的心身論に関する考察は、まだ十二分に展開されているとはいえない。というのも、インド思想や中国思想(特に道教)への視点が浅いからであろう。著者は、本書の後に刊行された『東洋文化の深層』(名著刊行会、一九八二年)『氣・修行・身体』(平河出版社、一九八六年)などの著作の中で、東洋的心身論の補論を継続されている。

(坂出 祥伸)

〔講談社学術文庫 一九九〇年 文庫判 三八八頁

定価一、〇〇〇円〕

鮫島信一篇『星のまたたき』

本書は八十翁の野添武二先生の叙述を娘婿の篇者がまとめたもので、次の七部からなる。

第一部 野添武二の家系図と年表

第二部 野添家

第三部 上野家

第四部 松木弘安(伯爵寺島宗則)

第五部 藩医とは

第六部 上村家

第七部 英医ウィリアム・ウイリス

野添武二先生の祖・秋岡冬日は江戸の出身で、二百年の寛政十一年(一七九九)はるばる江戸から薩摩に下り、加治木の藩校『毓英館』に教授として招聘された国学者。

祖父の上村泉三は、英医ウィリスの門弟で彼の助手として鳥羽伏見の戦い、越後会津の戦いに従事した医師。この上村泉三の祖父である上野良淳は、島津家二十五代の藩主重豪公、二十七代の斉興公、二十八代の斉彬公の侍医で、川内出身の漢方医。

松木弘安の養父松木雲徳は阿久根出身の漢方医で、重豪公の命で長崎に行きシーボルトに蘭医学を修めた医師。この良淳と雲徳の二人は、郷里が川内と阿久根と近く二人とも若き日に重豪公に召し出され親交があった。

長崎から帰鹿した雲徳は六十歳で逝去。このとき養子の松木弘

安はまだ十四歳であつたため、良淳が漢方医学の手ほどきをした。弘安は斉興公の命で、江戸に赴き蘭医学を戸塚静海に学ぶ。世子の斉彬公は祖父重豪公の西洋文化に興味を持ち、当代一流の蘭学者を招いた。

幕府が安政三年（一八五六）蕃所調所（後の開成所→東京大学）を創立した際、弘安は助教授に任命された。おそらく藩主になつていた斉彬公の推薦であろう。

安政五年、斉彬公が帰鹿した時、幕府の威臨丸が航海訓練のため鹿児島港に寄港した。船長の勝海舟が薩摩の近代工場を見たという申し出に、斉彬公は磯の集成館の接待役に松木弘安を命じた。

同年七月、斉彬公急逝後、弘安は江戸に上り開成所の教授となり、幕府の文久使節団の一員として福沢諭吉らと渡欧。その後元治二年（一八六四）、薩摩藩英国留学生を引率して英国へ。そのとき「出水泉蔵」と変名。大任を果たして帰鹿した後、弘安は若き日、漢方医学を手ほどきしてくれた上野良淳の孫に、泉三（泉蔵）の名をあたえたという。弘安はその後寺島宗則と改名し、英國公使、外務卿となる。

本書は、封建の世から文明開化の世と激動した時代に、夜空にまたたく小さな星のように精一杯生きた黎明期の医師の姿がありありと描写されている。

なお今次大戦で戦災を免れた、野添先生の生まれ育つた上村家には、古文書や掛け軸、秋岡冬日の漢詩、上野良淳の辞令、松木弘安―寺島宗則、高木兼寛（東京慈恵会医科大学の創立者）の書

簡、ウィリス愛用の医療器具などが写真に収められている。

一読に値する好書である。会員の諸賢にお薦めしたい。

（寺師 陸宗

三立舎 一九九〇年 A五判 二〇七頁 非売品

見市雅俊ほか著

『青い恐怖 白い街―コレラ流行と近代ヨーロッパ』

以前私が、約百年前に行なわれたコレラの病因に関するコッホとペッテンコッフアとの間の激しい討論の記事を読んだ時、コッホの主張が単純明快であるのに対して、ペッテンコッフアの論点がいかに不明確で、理解し難いことを感じた。しかしながら、本書を読んで私は、このような評価は今一度検討しなければならぬと感じた。

コレラ菌発見以前のコレラは、今日われわれが理解するコレラとは同じでない。つまり、種明かしの前と後の手品のようなものである。一九世紀のコレラ学説をレビューしようと思うならば、まずコレラ菌のことは一時棚上げにし、その当時の人びとと同じ立場に立つて見直さなければならない。

「青い恐怖」という名で呼ばれたこの本態不明のコレラに対して、当時の医学者たちは既存の知識と論理を駆使して、あらゆる方面から本態解明に向つたのである。本書は舞台を一九世紀に移し、当時の学者たちの立脚点と理論体系を克明に解説してくれて

いる。

医史学書の多くは、現代の視点から過去の医学を説明する。それは現代のわれわれにとっては理解し易いが、現代という色眼鏡を通して史実を見ているのだから、理解が偏っている危険があり、またこれから二、三世紀たった後には、今日の見解は通用しなくなるかも知れない。

本書では一九世紀当時の社会状況や思想背景が詳しく説明されているので、読者は知らず知らずのうちに自らを一九世紀に移すことができる。このようにしてコレラを「青い恐怖」としてとらえることができるようになった時、初めてその人は当時の学説を一〇〇パーセント理解できるようになるであろう。この意味で本書は医史学研究者にとって極めて有益な書物である。私も本書を読んだお蔭で、ペッテンコフアーのコレラ学説が当時の代表的な見解であり、コッホの主張がいかに異端の説であったかが理解できた。

ところで、コレラのこととはさておき、現在病因不明の病気はなお多数残っており、それらに対して無数の学説が提出されているが、いずれもまだ種明かしはされておらず、その状況は本書で紹介されている一九世紀のコレラをめぐる環境と大差がない。この意味で、本書はわれわれにとって他山の石であり、今後の医学に寄与する所も少くないと思われる。

(山本 俊一)

〔平凡社 一九九〇年 A五判 二九七頁 定価三、一〇〇円〕

山田慶児著『夜鳴く鳥—医学・呪術・伝説—』

本書は山田慶児氏が既に発表した中国医学史に関する論説のいくつかを再構成したものである。篇題ならびに各々の初出の論文は以下の通りである。

「夜鳴く鳥」『思想』一九八五年一〇月号

「医学の伝授」『漢方研究』一九七九年一〇月号、十一月号

「扁鵲伝説」『東方学報』一九八八年三月

「名医の末期」書き下ろし

「夜鳴く鳥」は、「戦国時代に行われていたある呪術療法の意味を解き、そこから発生して今日まで永らえている伝説と習俗の世界の拡がりを追跡したもの」であり、「医学の伝授」は、「古代医学体系の成立の背景に医学教育理念の大きな変革があったことを明らかにしたもの」、「名医の末期」は、「漢末魏初に生き、曹操に殺された神医、華佗の像を後世の眼で多面的に描きだそうと試みたもの」である。

最も多くの頁をさいている「扁鵲伝説」について、ここで少し詳しく紹介しておきたい。

中国医学史上最高の名医といわれる扁鵲に関する研究はこれまでに数多くなされてきており、一般には次のようなことがいわれている。「古典の中には扁鵲という人物があちこちに出てくるが、それらは、かつて実在したであろう一人の名医を指したものでなく、複数の扁鵲または扁鵲集団を指したものであろう。また、

やがて時代が下ると、扁鵲は名医の代名詞ともなり、さらに多くの扁鵲が登場するようになった。このように多くの扁鵲をかかえた状況の中であって、これまでの研究の多くは、実在したはずの扁鵲がどのような人物であり、どのような治療をしたのかという点を明らかにすることを対象としてきた。また、研究の方法は、『史記』の「扁鵲倉公列伝」の中の扁鵲に関する難解な記述の解釈が中心であった。これに対して、本書では、『史記』における扁鵲についての記述は、実在したであろう扁鵲の姿とはほど遠いものであるという立場をとり、『史記』の書かれた時代の名医の理想像を強く反映した記述であろうと結論づけている。既に江戸時代末期に尾台榕堂が『医余』の中で、『史記』の記述は『史記』以前の書物である『韓氏外伝』の扁鵲に関する記述を「潤色鋪張」したものであろうという説を述べており、この点、山田氏の説に一致している。しかしながら、山田氏は、むしろ、『韓氏外伝』の記述も本来の扁鵲の姿を述べたものではなく、その当時の理想の名医の姿を重ね合わせたものという立場をとっている。また、他の古典にみられる扁鵲の記述に関しても同じような作業を積み重ねている。このような作業の結果、これまでの扁鵲に関する研究とはずいぶん違った内容のものとなっている。すなわち、議論の中心は実在したはずの扁鵲の実体を明らかにすることではなく、各時代の名医の姿を投影した扁鵲伝説がいかに作られていったかを明らかにすることに向けられている。

扁鵲に関する研究は一筋縄では行かない面がある。これまでの研究の行き詰りを新しい視点で打破しようとする山田氏の論説に

は勢があつて興味深い。なお、扁鵲や華佗について中国医学史の立場で論じたものに加納喜光氏の『中国医学の誕生』（一九八七年、東京大学出版会）がある。本書の説と比較しながら読まれると一層興味深いものとならう。

（遠藤 次郎）

〔岩波書店 一九九〇年 B六判 三四頁
定価二、九〇〇円〕

アグネス・アーバー著、月川和雄訳

『近代植物学の起源』

本書は、Agnes Arber; *Herbals, Their origin and evolution, a chapter in the history of botany, 1470~1670, 2nd rev. ed.*, Cambridge, 1938 の翻訳書である。書名を直訳すると「本草書、その起源と発達、植物学史の一章、一四七〇～一六七〇年」である。ハーバルを本草、本草書と呼ぶことが多いが、中国、日本の本草と同一のものとはいえない。そこで、訳者は本書の題名を『近代植物学の起源』としたようである。しかし、本文では、ハーバルを本草書と訳している。

本書の著者 Agnes Arber (1879~1960) は、イギリスの植物学者、植物学史家で、女性として三番目に王立協会員になった学者である。原典の初版は、一九二二年に刊行され、本書の原典は第二版である。大中を増補され、二五三頁が三二六頁になっている

る。原典は、西洋本草学史の古典として、日本においても読まれ、著作、論文に引用されてきている名著である。

本書は、一四七〇年から一六七〇年までの刊本の本草書の歴史が主題であるが、本草書の歴史としては、印刷術発明以前の本草書の歴史を語る必要であるとして、古代ギリシアから、中世にかけての写本の本草書の歴史にまで、さかのぼっている。第一章がこの部分に当るのである。

第一章植物学の初期の歴史は、古典古代の本草書についてである。アーバーは、植物研究には、二つの流れがあり、一つは、哲学的観点のものであり、他方は実用的観点のものであるとし、二つの流れは、別々の道をたどることが多かったとしている。前者はアリストテレス流の植物学、後者は薬効的植物学である。植物学は、医学にはかりしれない恩恵を受けてきた。本草学者は、ほとんど医師であった。医学は、植物の分類ばかりでなく、植物の内部構造の研究の最初の推進力であった。アリストテレス、テオフラストス、ディオスコリデスなどが語られる。

第二章最初の印刷された本草書（一五世紀）は、印刷本の本草書が出はじめた時代がテーマである。播籃期本（一五〇一年以前の印刷本）についてである。ここで、本草書（ハーバル）の定義が示されている。「薬草、一般的には植物の特性と効能を含めた名称と解説を記載した書物」と定義している。

第三章イギリスにおける初期の本草書の歴史は、イギリスにおける播籃期本についてである。

第四章一六、七世紀の植物学のルネサンスが、本書の主題であ

り、本書の三分の一以上の頁をあてている。一六、七世紀は、植物学発展の時代であり、本草書の歴史の新時代である。「ドイツ植物学の父」であるブルンフェルス、ボック、フックス、コルドウス、ネーデルランドの植物学者ドドネウス、レクリューズ、ド・ローベルの本草書が出てくる。

日本医史学会会員、それも、江戸期蘭学史に関心がある方々は、ドドネウス、リンネについては知っているであろう。本書は、一八世紀のリンネ以前が扱われているので、ドドネウスについては、当然本章で扱われている。一読されたい。また、日本に舶来した蘭書の多くを刊行した出版業者プランタンについても紹介している。その他ヨーロッパ各地の植物学者（本草学者）の本草書について述べる。第四章八節は、脂葉標本の起源についてであり、貴重な一節である。

第五章植物記述法の発展では、第四章、すなわち、一六、七世紀の本草書の記述が、科学的、植物学的に見て、すぐれているかどうかを検討している。植物学的にすぐれた植物図を載せた本草書が必ずしもすぐれた記述法をとっていないという指摘を、具体的に示してくれている。

第六章植物分類法の発展は、リンネ以前の歴史が語られる。

第七章植物図譜の技法の発展は、写本の時代、木版画の時代、金属版画の時代の図を、その具体的技法と図について紹介しながら、植物学的観点から優劣を論じている。第八章象徴の教説と占星術的植物学では、バラケルスたち、植物学に関心をもった異端の人たちへのきびしい批判である。

第九章結語でまとめられている。「一七世紀の後半植物学は急速に科学的になり、(中略)医学的知識と植物学的な知識の混合という特徴をもっていた「本草書」は、時がたつにつれて、一方では医学専門の「薬局方」の前に、他方では植物学専門の「植物誌」の前に道を譲った」としている。

近代植物学、近代薬物学の由来を知り、日本に影響大であったドドネウス自身、リンネの背景を知るための良い本である。あわせて木村陽二郎『ナチュラリストの系譜—近代生物学の成立史』(中公新書)をすすめたい。

(矢部 一郎)

〔八坂書房 一九九〇年 A五判 二七七頁

定価七、八〇〇円〕

松本明知編『北海道医事文化史料集成』上・下

一九八五年に弘前市で第八五回の本学会を主宰された編者は、記念事業として『渋江抽斎の研究』・『直舎伝記抄』を刊行し、引き続き八六年には『津軽医事文化史料集成』上を、八八年には同・下を上梓されたが、九〇年五月この大冊を公にされた。

編者によれば、日本での外来文化の伝播は、動植物の渡来から疫病に至るまで、主として九州から東漸北上したが、この原則の例外が、最初の栽培地が津軽と推定されるケシ栽培と、いま一つがシベリア經由でまず松前、秋田で実施、ついで津軽に伝授され

た形跡のある北方系の種痘である。

本書は北海道の医学史上の史料をこの種痘関係を中心に集めて覆刻し、丁寧な解題を付けたもので、原史料が読み易い場合は写真版としてあり、またすでに稀覯に属する論文、ときには単行書までも収録したものとなっている。

ここで多岐にわたる内容をすべて紹介するのは困難だが、ごく大きっぱに収録史料を列挙して見る。

(一) 中川五郎治関係文書(三点)、(二) 五郎治が帰国後に取調べに対して答えた記録「御申上荒増扣」、(三) ロシアでの見聞を記した「異郷雑話」、(四) 前記「荒増扣」の要約ともいえるべき「五郎治話」、(五) 口上書である「五郎治招状」、(六) 編者が秋田で発見した「白鳥雄蔵種痘之書」(雄蔵は五郎治の弟子)、(七) 蒲原宏氏が新潟で発見された「中川五郎治種痘文書」、(八) 阿部竜夫著「中川五郎治と種痘伝来」ほか、(九) 加藤蓼洲「秋田藩最初ノ種痘医」、(十) 『遁花秘訣』写本(京大富士川本)、ここまでが上巻所収。

下巻は、(十一) 一八五〇年の刊本である利光仙庵編『魯西亜牛痘全書』、(十二) 言語学者でモスクワで原書を発見された村山七郎教授による現代日本語訳、(十三) 一八〇三年版原本、(十四) 一八〇五年版原本、(十五) オホツカ役人から松前役人への書簡抄、(十六) 中川五郎治研究文獻目録(編者による未定稿)、(十七) 一八一一年カムチャッカに漂着し、翌々年牛痘苗を持って帰還した安芸の久蔵の口書である『魯西亜国漂流聞書』(木崎良平解説)、(十八) 米医S・エルドリッジ(一八四三—一九〇一)の

函館医学校での講義をまとめて刊行した『近世医説』(一)~(三)、
〔一〕は編者が発見)、の諸篇を収録している。

以下には紙幅の許すかぎりわずかな注記・印象を追加しておくこととする。

(八)の阿部竜夫博士(一八九二~一九八四)は、知られるとおり市立函館病院の小児科医で、歌誌を主宰するなど多才な方であつたが、医学史方面の論著も多く、『中川五郎治と種痘伝来』(一九四三)はその代表的な著作に属する。ただし、発行部数が少なく、編者の「まえがき」によれば、入手できなかった当時医学生編者が借覧を求めたのに対して、阿部博士は「自分は高齢で最早医学史の研究はできないので、是非君がこの研究を続けて集大成して下さい」と言つて快く貸与されたという。

編者は阿部博士の学恩に感謝しているが、昭和三十六年のことと回顧されているので、編者の蓄積のほどを知るに足る挿話でもある。

上記の(十)から(十四)までの『蓮花秘訣』の写本、現代語訳、原本は本書の中核をなす部分で、種痘史の研究者を最も裨益する部分でもあろうが、これだけ完備した数々の原典に触れることは、一般の医史学徒にとつても感銘の深い体験になってくれる。

写本としては小川鼎三・酒井シヅ両氏による岩波版『洋学』

(下)所収の函館市立図書館本と異なつて、ここでは京都大学の富士川本が底本とされている。また、中川五郎治が日本への帰還の途中に入手した種痘書は、村山教授がモスクワのレーニン図書館で見出してマイクロフィルムで入手されたところによると、

一八〇三年ペテルブルグ発行の『牛痘普及により天然痘感染を完全に通れる方法』で、「江戸時代きつての語学の鬼才」(小川鼎三)、「徳川時代を通じての最も偉大な博言学者」(で私が深い尊敬の念をいだいている)〔村山七郎〕であつた馬場佐十郎が、一八二〇年に『蓮花秘訣』として訳出したものである。そして、小川先生の序文を伴つて『順天堂医学雑誌』に掲載された村山訳は馬場から「一四五年をへだてて」なされたものである。

なお、(十五)の書簡は、オホーツクの役人ミニイッキイから松前の役人宛のもので、五郎治の人となりを称賛して帰国後の処罰の軽からんことを願う内容のもので興味深い。また、(十八)の『近世医説』は、北海道で出版された最初の医学書という意味でも貴重な史料と言えよう。

本書は従来刊行された一連の書籍同様に岩波ブックサービスセンターの製作にかかり、印刷造本などにも十分に意を用いている。

(三輪 卓爾)

〔三〇〇部限定、価格記載なし(発行者・第八六回日本医史学会(会長・松木明知) 弘前市在府町五・弘前大学医学部麻酔科教室内) A五判 上巻 口絵四頁・目次・まえがき・史料解題三八頁・本文五〇二頁、下巻 五一二頁〕